

3月第4週の礼拝説教

■日 時：2024年3月24日（日）10：30～11：30 受難節第6主日

（棕櫚の主日）礼拝

■説 教： 保科けい子牧師

■聖 書：新約：ヨハネによる福音書 12章 12節～65節（新約 p192）

■説教題：「 なつめやしの枝を持って 」

■讃美歌：307 「 ダビデの子、ホサナ。祝福あれ、」

313 「 愛するイエス、何をなされて 」

本日は教会暦によりますと「棕櫚の主日」になり、主イエスがいよいよ十字架にお架かりになるためにエルサレムにお入りになったことを思い起こす主の日です。四つの福音書すべてにその様子が記されていますが、少しずつ観点が異なります。ヨハネによる福音書の特徴の一つは、主イエスがエルサレムへ上っていかれる回数の違いです。2章13節、5章1節、そして本日の箇所12章12節以下と、合計で3回エルサレムに上られたこととなります。福音書の初めのほうの2章13節以下で、すでに主イエスがエルサレム神殿から商人達を追い出すという出来事を記していることを深く考えますと、ヨハネによる福音書が終始一貫して見つめているのは、ガリラヤでの伝道や弟子たちとの関わりにおける主イエスよりも、「主イエスの十字架と復活」である、ということもできると思います。

ところで、「棕櫚の主日」という名前の由来になったのは、ヨハネによる福音書12章12節、13節に記されている「その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、13なつめやしの枝を持って迎えに出た。」という箇所であることがわかります。このなつめやしの木は、イスラエルでは街路樹にも使われ、その実もありふれた日常的な食べ物として用いられています。日本では「棕櫚」と呼ばれているので、そこから「棕櫚の主日」という表現が出てきたのでしょうか。そのようにヨハネによる福音書は群衆が手にした木の名前まで具体的に記し、その場の情景をいきいきと描いています。そのことによって、主イエスが実際にエルサレムにお入りになったのだということを強調しているように思われます。エルサレムというのは城壁に囲まれた町です。町の中に入るためには、いくつかある門のどれかを必ず通らなければなりません。城壁の東側、ケデロンの谷を挟んでオリーブ山に向き合っている所に「黄金門」があります。現在の門は、7～8世紀頃に再建された物であると言われています。ユダヤ教徒たちの伝説によると、終末の日にはメシアがその軍勢を引き連れてこの門から入場することになっているというので、それを防ぐためイスラム教徒たちが閉ざしてしまったということです。しかし、このことはエゼキエル書44章1～2節に次のように預言されている通りの情景であるという人もいます。読んでみます。「それから、彼はわたしを東に面した聖

所の外の門の方へ連れ戻した。門は閉じられていた。2主はわたしに言われた。『この門は閉じられたままにしておく。開いてはならない。だれもここを通ってはならない。イスラエルの神、主がここから入られたからである。それゆえ、閉じられたままにしておく。』私がイスラエルに行きました1999年の時にも、この黄金門は閉じられていて警備のアラブ人たちがおりその近くには近づけませんでした。しかし、およそ2000年前には確かに、旧約聖書のゼカリヤ書9章の預言どおり、ろばの子に乗る王として主イエスはその黄金門からエルサレムにお入りになったのです。

13節のかぎかっこの中を御覧下さい。「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、／イスラエルの王に。」とあります。詩編118篇25,26節をみますと、「どうか主よ、わたしたちに救いを。どうか主よ、わたしたちに栄えを。26祝福あれ、主の御名によって来る人に。わたしたちは主の家からあなたたちを祝福する。」とあります。大勢の群衆が叫んでいた「ホサナ」という言葉は、その当時イスラエルでよく使われていたアラム語の「ホシャアナー」という言葉をそのままギリシャ語に音訳したもので、「どうか私たちに救いたまえ」という意味であると言われています。また13節は、過越のお祭りに歌うと言われている「過越のハレル」とも呼ばれる詩編118篇の中の、25,26節を叫んでいたということも考えられます。マタイによる福音書やマルコによる福音書では、主イエスが弟子達と共に過越の食事をなさった後で、一同で讚美の歌を歌ってからオリーブ山へ出かけた様子が記されていますが、そのときの歌は「過越のハレル」と呼ばれる詩編113篇から118篇であろうと考えられています。「過越のハレル」と呼ばれる詩編全体は、かつてイスラエルの人々がエジプトにおける奴隷としての苦しみの生活の中から神様に助けを求めて呼び求めた時、神様がそれをお聞きになって助け出してくださいましたことを繰り返し覚えるという内容になっています。ですから、今日の箇所、過越の祭りに来ていた大勢の群衆がエルサレムにお入りになる主イエスをなつめやしの枝を持って迎え、詩編118篇の25, 26節を叫び続けた、ということにも同様の意味があるのです。ですから、ヨハネによる福音書に引用されている「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、／イスラエルの王に。」という叫びは、決して手放して主イエスのエルサレム入場を喜んでいるものではなく、大勢の群衆が置かれた当時のローマ帝国の支配下にある様々な苦しみや悲しみを表していたということが分かります。だからこそ、「主の名によって来られるまことのイスラエルの王」に、今こそ救ってください、と叫んでいるのです。私たちが主なる神様に、また主イエスに、さらには助け主なる聖霊に、叫び求めるときもまた同じような状況にあるのではないか、と思います。私たちが常に正しく生きることができ、自分の力ですべてのことを解決でき、自分の人生に意味を見出し何の不安も苦しみもない、というのであれば、おそらく私たちは主なる神様も主イエスも聖霊の助けも必要とはしないのです。しかし私たちは、そのような人生など決してありえないということを知らされているがゆえに、また、何よりも私た

ちは主なる神様の御計画の中に作られ生かされているがゆえに、今、この礼拝に招かれて主イエスの御臨在に与ろうと願っているのではないのでしょうか。

さて、14,15節を御覧下さい。「イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおりである。15 『シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、／ろばの子に乗って。』」とあります。15節は旧約聖書のゼカリヤ書9章9節からの引用です。預言者ゼカリヤが活動したのは紀元前520年頃と言われ、イスラエルの民がバビロン捕囚という苦難からやっと解放されて故郷のイスラエルに帰ってきた時代です。預言者ゼカリヤたちは、廃墟となったエルサレムに神殿を建設し主なる神様を礼拝することにより、イスラエルとその国民は回復される、との託宣を受けたのです。そして、ゼカリヤ書9章9節にあるように「高ぶることなくろばに乗って来る王」がおいでになり諸国の民に平和が告げられる、との預言を託されたのです。さらにゼカリヤ書9章10節は「わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。」と記しています。それから数百年の時が流れました。祭司や律法学者達は、いつの時代であっても、懸命に祭儀を司り、御言葉の学びと教えに励み、「メシア」が到来することを語り継いで来たに違いないのです。しかし、主イエスが来られた時代になっても、相変わらず「選ばれた民イスラエル」は、武力において強大な外国の支配を受けている状況でした。そして、私たちが生かされている今もなお、国と国との争い、民族と民族との争いが続いており、そのような事態を收拾するにはさらに強力な力を背景とする仲介者が必要なのではないか、とも言われています。そして、私たちもまた、いつの時代でも求められていた自分たちにとって都合の良い何でもおできになる「オールマイティ」の王や救い主を望んでいるのではないか、と気づかされます。しかし、旧約聖書の預言者ゼカリヤも「高ぶることなくろばに乗って来る王」を語り、ヨハネによる福音書もまた、そのようなお方が「王」としてお出でになることを語っています。16節に「弟子たちは最初これらのことが分からなかったが、イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについて書かれたものであり、人々がそのとおりにイエスにしたということを思い出した。」とあります。今に生かされている私たちは、すでに主イエスが十字架にお架かりになって栄光をお受けになったことを知っています。だからこそ、私たちは、本当の平和をもたらす王として、また本当の救い主として、この世に来られ、私たちの贖いとして十字架にお架かりに成った主イエスを、今週一週間の受難週の間、特に心に深く覚えたいと思います。